

In April 2022, Osaka City University and Osaka Prefecture University merge to Osaka Metropolitan University

Title	階級意識とお茶：ウルフの『夜と昼』より
Author	村上, ゆり
Citation	表現文化. 1 巻, p.95-106.
Issue Date	2006-03
ISSN	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	Publisher
Publisher	大阪市立大学文学研究科表現文化学教室
Description	

Placed on: Osaka City University

Osaka Metropolitan University

階級意識とお茶

—ウルフの『夜と昼』より—

村上ゆり

現代社会において日常的に存在しているコーヒー・ショップの歴史を振り返ってみると、17世紀半ばにコーヒー・ハウスの第1号店がオクスフォードに開店し、以後17世紀後半に向けコーヒー・ハウスの全盛期となる。コーヒー・ハウスは政論の場所として利用され、さらには今で言う「文化的インターネット」の役割を果たす場所として流行した。¹しかし男性だけの社交の場であったことに対する女性たちの反感は『コーヒー反対嘆願書』となって抗議の形で表れ、この『コーヒー反対嘆願書』には「コーヒー豆が男性を性的不能者にする」という、医学的根拠のないことが書かれたりしていた。²18世紀半ば頃からコーヒー・ハウスは政府の執り行った植民地政策の一つであるコーヒー豆の輸入制限により廃れ、お茶に比重をおいた生活へと変遷していった。さらに女性が行ける社交の場としてティー・ガーデンができ中産階級、上層階級の女性たちがヴィクトリア女王のティー・タイムを真似たことから、アフタヌーン・ティーの習慣が定着していった。

日本語でも「日常茶飯事」という言い方があるように、「お茶」は人間の生活と密着しながら文化として充実し広まった。それ故に多くの作家達が作品の中で様々な意味を「お茶」に担わせたり、「お茶」を象徴的に扱った作品を書いたりしている。アントニー・グリン(Anthony Glyn)は『イギリス人：その生活と国民性』(*The British: Portrait of People*)の中で、お茶を飲む習慣には階級差が現れると書いているが³、実際に中産階級の人々が真似るお茶のマナーを上流階級の人々は伝統的に遂行し、階級の違いを強調したり、地位を誇示する大きな手段としていたことは容易に推察できる。本稿では、ヴァージニア・ウルフの『夜と昼』(1919)の中から「お茶」にどのような意味が投影されているのかを、そして「お茶」とウルフの「階級意識」との関連性を考察する。

ウルフは、女性に自立の必要があることを訴え、小説『夜と昼』のなかでも、「自活」をする25歳の自立した女性、メアリー・ダチット(Mary Datchet)を登場させる。ウルフがかって敬愛したヘンリー・ジェイムズ(Henry James)は、『ボストンの人々』(*The Bostonians*)で、女性による女性のための改革を志す女権運動家達の会合を描いた。⁴ ウルフは、独身女性メアリー・ダチットを、『ボストンの人々』に登場する女性達と同じように、女性運動家として『夜と昼』に登場させている。社会改革を目指す集会は、ウルフをはじめ兄姉や友人達とで活動していたブルームズベリー・グループとも重ねている。この運動家であるメアリー・ダチットは芸術を論じるため、あるいは国家を改良するという目的の会合に自分の「自活」する部屋を提供している。次の引用は集会の準備をしている様子の描写である。

At the end of a fairly hard day's work it was certainly something of an effort to clear one's room, to pull the mattress off one's bed, and lay it on the floor, to fill a pitcher with cold coffee, and to sweep along table clear for plates and cups and saucers, with pyramids of little pink biscuits between them; but when these alterations were effected, Mary felt a lightness of spirit come to her, as if she had put off the stout stuff of her working hours and slipped over her entire being some vesture of thin, bright silk.⁵

この場面は実際のブルームズベリー・グループの会合ともイメージが重なるが、ここで、ウルフは「寒い11月の夜」⁶と季節を描写しながら冷やしたコーヒーを飲ませて場面設定に用いている。1904年にアメリカのセントルイス万国博覧会で、はじめてアイス・ティーが考案されたという史実から⁷、ウルフが新しい飲み方として意識的に「冷やしたコーヒー」を用いたことが考えられる。ブルームズベリー・グループの会合では通常コーヒー、ココア、ウイスキーであったと記録されている。⁸ そしてこの引用場面の「配列が終わると、メアリーはこころが軽くなるのを感じた。まるで労働用の頑丈な服を脱いで薄い明るい絹の衣服を全身にまとったようだった」という表現は、メア

リーの集会に対する気構えと、メアリー自身の実際の気持との間の矛盾を表している。国家を改良するという野心を抱くほどの革新的思想を抱く女性にはイメージ的に労働用の丈夫な服が似合うという意識があるにもかかわらず、会場作りが終わった安堵の気持を繊細で軽やかなより女性らしい服をまとったような気持になると表現することで、メアリーの行動が意識的であることを暗示している。この意識的な行動を示す表現は、日常のむしろリラックスした雰囲気をお茶でイメージさせるお茶であってはならないのだ。ここで敢えてコーヒーを準備することにより、因襲的な生活との区別が意味されている。

お茶が因襲的あるいは伝統的な生活慣習と結びついていることは次の引用の場面に現れている。

Mary found herself shaking William's hand, and addressing her congratulations to him, as if Katharine were inaccessible; she had, indeed, taken hold of the tea-kettle, 'Let me see,' Katharine said, 'one puts hot water into the cups first, doesn't one? You have some dodge of your own, haven't you, William, about making tea?'

Mary was half inclined to suspect that this was said in order to conceal nervousness, but if so, the concealment was unusual perfect.⁹

これは友人であるメアリーに、キャサリンとウィリアムが婚約の報告をしている場面である。キャサリンにとって、この婚約は真実の愛情をともなったものではなく、自分の意に適った生活、つまり中産階級の家庭生活を維持する為の手段として、ウィリアムが必要だったにすぎないのだ。「あなたのお茶の入れ方があるのでしょうか?」と聞いて、キャサリンはウィリアムのお茶の入れ方と自分のそれがさして変わりはないはずであることを承知の上で、敢えてそのことを強調している。ウルフはお茶の入れ方や飲み方が階級によって違いがあることを意識して、二人の身分を暗に表現している。引用の後半に「メアリーは、キャサリンのこの問いが、心の動揺を隠すために言ったのではないか、と半ば思った」とあるように、ウルフはキャサリン自身のうしろめたい感情表現にお茶を利用して表現した。キャサリンは、ウィリアムとの婚約が不本意であることを意識しないまま(心の整理がつかないまま)メアリーへ

報告するはめになったために、自らを落ち着かせ勇気づける手段としてお茶の入れ方が使われたと考えられる。

お茶はマンスフィールドの *A Cup of Tea* でも精神安定剤、蘇生剤として用いられているが¹⁰、この場面でも同様な扱い方がなされている。「お茶の入れ方」に関して、オーウェルは *A Nice Cup of Tea* の中でお茶はイギリス文明をささえる大黒柱の一つであり、お茶の正しい入れ方は大議論の種になるといって、11 項目に分けて処方を書いている。金属製ではなく陶磁器のポットでなければならないというのもその一つである。¹¹ それほどイギリス人にとって、もっともこだわりのある作法のひとつなのだ。

日常生活における最も自然な「お茶を入れる」あるいは「お茶を飲む」という動作は、その処し方如何によってはその人物の心の変化を暗黙のうちに他者に伝える重要な手段にもなる。次の引用では、お茶を飲む所作が己の心の動揺をおさえ、それによって相手をさらなる寛容な礼節へと導くことが述べられている。引用は結婚の約束をしているウィリアムとカッサンドラがキャサリンとレイフの婚約を確認したくて彼女の家を訪れている場面である。

She [Cassandra] controlled herself, sat down, poured out a fresh cup of tea, and sipped it quietly. This natural action, arguing complete self mastery, and showing her in one of those feminine attitudes which William found adorable, did more than any argument to compose his agitation. It appealed to his chivalry. He accepted a cup. Next she asked for a slice of cake. By the time the cake was eaten and the tea drunk the personal question had lapsed, and they were discussing poetry.¹²

しかし、肝心の話は聞きだせず、みなが外出した部屋にウィリアムとカッサンドラ二人だけが取り残され、二人の婚約をみなに知られる前に二人だけであるところを他人に見られるのを心配している場面である。動揺する心理状態を他人から読み取られないように、二人は「所作」でコントロールしている。カッサンドラの静かにお茶を飲むという「所作」が完璧であるほど、カッサンドラ自身の心の動きをコントロールすることのみならずウィリアムの心の動きにも影響を与えている。カッサンドラの

「静かにお茶を飲む」という「所作」が、彼女の心理的な動揺を隠し、ウィリアムが「詩を論じる」という日常的行為への導入の役割を果たしている。この心理描写は前に引用したキャサリンの「お茶の入れ方云々」をメアリーが「心の動揺を隠す為」と感じたのと同じ働きをしている。

II

「お茶を飲む行為」にとどまらず、「お茶」に関わる物理的な具象物を見る際にも心理的な動揺は表れる。

‘Don’t you think everything looks quite different?’ ‘You’ve moved the sofa?’ he [William] asked. ‘No, Nothing’s been touched,’ said Katharine. ‘Everything’s exactly the same.’ But as she said this, with a decision which seemed to make it imply that more than the sofa was unchanged, she held out a cup into which she had forgotten to pour any tea.¹³

ウィリアムとキャサリンの価値観の違いから、二人の婚約が破棄され、キャサリンのいどこにあたるカサンドラと、ウィリアムとの間に新たな恋が芽生えるのだが、ふたりともキャサリンの次なる行動が気になっている。つまりキャサリンと同じく、自らの理想の世界に生きるレイフとキャサリンとの婚約を確認したいのだ。キャサリンからレイフと婚約したという確答を得られないながらもキャサリンの行動から、あらかたを推察したカサンドラの心理的な表明が、この引用である。「ソファを動かした」ように見えるという、つまり物理的(外的)状況の変化は、皆無であるにも拘わらず、心理的(内的)には変化して見える。しかも、「違って見える」と発言するという外的動作は、キャサリンが「空のままの紅茶碗」をさしだすという外的動作に帰結している。

キャサリンとその価値観を等しくするレイフの心理描写に、この心の動きと外的動作の葛藤が折りに触れ表明される。

He had made no effort to tide over the discomforts of her introduction, and now engaged in argument with his brother, apparently forget her

presence. She must have counted upon his support more than she realized, for this indifference, emphasized, as it was, by the insignificant commonplace of his surroundings, awake her, not only that ugliness, but her own folly. She thought of one scene after another in a few seconds, with that shudder which is almost a blush. She had believed in a spiritual light burning steadily and steadfastly behind the erratic disorder and incoherence of life.¹⁴

この引用は、キャサリンが、自分にとっての正直な生き方が、どのようなものであるかに気づく瞬間の場面である。キャサリンは階級の違うレイフの家を訪れた際に、目にした家具、調度品や装飾に不快を感じ、その滑稽な趣味からレイフの人間性そのものを低く評価してしまう。にもかかわらず、レイフはありのままの家庭の環境、状況をあげすけに紹介している。このレイフの正直な行動はキャサリンの実際の行動とは全く対立したかたちで、彼女に彼女自身のおろかさを認識させることになる。テーブルや、テーブルクロス、陶器の壺、茶器等の具象物と、レイフの率直な動作とが相俟ってキャサリンの心理的葛藤が引き起こされる。この場面はウルフの実生活、つまりレナードとの結婚を決める前に彼の家をおとずれた印象と重ねられている。¹⁵ 階級と文化のレベル上で、

夫レナードとレイフを重ね合わせ、ウルフ自身の人生観をキャサリンに託し「婚約も結婚もすべて人生への探求の道」¹⁶であることを表現している。キャサリンは、中産階級の表面的な生活様式と、レイフの正直な理想を追求した生き方を無意識に対比させる。この物理的な家具調度品ほど所有する人々の意識を表現するものはないだろう。レイフが、キャサリンの家を最初に訪れたときの状況がそのことを証明している。「濃い影でみちた部屋や明かり、ゆらめかない銀のろうそくの炎、銀の盆と紅茶茶碗が軽やかにのった丸いテーブル…」¹⁷と中産階級の家庭の表現にその象徴でもある銀のプレートと茶器が登場する。

ウルフの父親レズリー・スティーブンは最初に結婚したハリエットの父親、サッカー(W. M. Thackeray)は、*The Book of Snobs* の中で、中産階級の食卓の様子を描いて、スノビズムを皮肉った。その食卓にはムダと思える銀皿セットがあったり、サッカー夫人の銘が刻まれた銀食器等のことが皮肉たっぷりに列挙されている。¹⁸

銀食器類や個人名を入れたり、ちょっとした銘を入れたりした食器を所有することが中産階級のステイタス・シンボルとして 19 世紀に流行していたことが解る。銀のプレートやティー・カップは実用向きでなく、むしろ虚栄心を満足させるもの、あるいはオーナメント的な意味合いを備えたものであったのだ。さらに、それは装飾品に留まらず、家庭の家宝的扱いをされる場合もあったようだ。

ウルフは「書評について」(‘Reviewing’)の中で自分にとって最も重要な文学を論じるという付加価値をティー・ポットにも与えている。

The art of writing is difficult; at every stage the opinion of an impersonal and disinterested critic would be of the highest value. Who would not spout the family teapot in order to talk with Keats for an hour about poetry, or with Jane Austen about the art of fiction?¹⁹

このファミリー・ティーポットが銀製なのか陶器なのかこの引用からは明らかではないが、言える事は先祖代々受け継がれた日用品がその家系の誇りであり、象徴であるという事実である。引用では、作家であるウルフにとって一番重要なことは、詩についてキーツと論じたり、小説についてジェーンオースティンと議論したりすることであること、そして、家宝であるティー・ポットは文学を論じることよりは劣るが、象徴としてそれほど重要なものであることが伺える。

ウルフは『夜と昼』のなかでもメアリーのティー・ポットに対する思い入れを著している。

The three of them[Katharine, Ralph, Mary] stood for a moment awkwardly silent, and then Mary left them in order to see that the great pitcher of coffee was properly handled, for beneath all her education she preserved the anxieties of one who owns china.²⁰

メアリーの部屋での集会で、メアリーが冷やしたコーヒーを入れた水注しを、気にかけている場面である。文字通り「水注し」と解釈する場合、教育があつて、しかも活動的なメアリーが、家庭の細かい備品にも気配りをする女性らしさを持ち合わ

せているという意味から、単純にメアリーの性格描写と捉えることができる。しかし、これまでに語られてきたメアリーの心理描写、例えば最初の引用で取り上げた、会合の為に、お茶ではなく冷たいコーヒーを用意したことや、部屋の模様替えが終わると労働用の服から絹の衣服に着替えたような心持になったことなどの描写を考察すると、この「大きな水注し」はメアリーの社会を変革したいという大志に重ねられている。水注しを改革を志す器、つまり「大志」と解釈した場合、半永久的な持続性のある銀食器とは異なって、いつの日か壊れる不安を秘めた「脆弱さ」意味している。つまりメアリーの「繊細さ」を表象するものと解釈することが出来る。メアリーにとって重要なことは社会という大きな目標であるはずなのに、なぜそれとは対照的な日常の些細な小物に注意を払うのか、結局メアリーの内面と外面との対比をこの陶器に託したと理解することができる。

III

メアリーの社会変革を志すという活動的な気持と、細やかな心理との間の葛藤に対して、主人公キャサリンの心理は少なからず母親ヒルベリー夫人からの影響を受けていることが読み取れる。キャサリンと、詩人を父親に持つキャサリンの母親ヒルベリー夫人は、典型的な中産階級の生活形態に、どっぷり浸ってはいるものの、内心忸怩たる気持を隠しきれないでいる。ヒルベリー夫人は、「全てのことが自分の願望通りになっているにも拘わらず、涙をとめることができず、自分の人生が失敗でもうほとんど終わりかけていて、年月がたいそう残酷に思える惨めな老婆のようにはか感じられない」と、叔母のミルヴェイン夫人 (Mrs. Milvain) へ手紙を書き送っている。²¹ この手紙の、「全てのことが自分の願望通りになっている」は、ヒルベリー夫人の思惑、つまり中産階級の生活を乱さないで、それを維持して行く上での平穏さを意味している。この叔母に宛てた手紙の心情は表面的に家庭夫人として腰を据えていたヒルベリー夫人の心理的葛藤を描いたお茶の場面が複数あることから肯ける。

Her mother [Mrs Hilbery] gave a little cry as she[Katharine] came in; a cry which conveyed to Katharine the fact that she was late, that the tea

cup and milk-jugs were in a conspiracy of disobedience, and that she must immediately take her place at the head of the table and pour out tea for the guests.²²

ウルフは、紅茶茶碗やミルク注しをヒルベリー夫人の意のままにならぬ因襲に喩えている。中産階級の家庭婦人たちが日常的にゲストを迎えたお茶会の時間を持つ習慣の例に漏れず、ヒルベリー夫人は長年、生活の一部の慣習としてそれを実行してきた。“Who is going to be mother?” とか“Shall I be mother?”といった言い方があるように、tea server=mother つまり母親はお茶会において茶席を取り仕切るもっとも重要な役割を担っている。²³ この引用では、長年の慣習であるにもかかわらず、なぜかティー・カップとミルク注しが彼女の思う様にならず小さな叫び声をあげてしまい、その役割を娘、キャサリンに代わってもらうことになる。ヒルベリー夫人のホスト役をキャサリンが代行したことにより家庭の天使的役割をヒルベリー夫人はある部分、放棄したことを暗示している。ちなみにヒルベリー夫人はサッカーの二女でウルフの叔母にあたるアニーをモデルにしたとウルフは記録を残している。²⁴

IV

現代の「情報社会」を歴史的に分析して、その源のコーヒー・ハウスやサロンそしてクラブの役割が必須のものであったことを高山宏は『サロンとクラブ』で述べ、人間が個の日常的にソリッドな正体あるいは身分を他者の前で一旦「液体化」するという様態を取り上げて、「液体が交換の象徴であり、交渉の為のメディアである」と指摘した。そして、クラブやコーヒー・ハウスのテーブルのまわりの液体を錬金術的な意味合いで、また媒質という意味合いで見ると必要があるということを書いた。²⁵ たしかに液体は物理的作用を一つの場所から他の場所へ伝達する、仲介物として有用な働きをしている。これまで引用した中でも登場人物のさまざまな心理描写に「お茶」は必須の役割を果たしている。

マンスフィールドが書いた、行きずりの物乞いの女性が一杯のお茶で蘇生し、主人公の女性が蘇生した女性に嫉妬を覚えるといった内容の *A Cup of Tea* にしろ、アンダーソンの 1950 年代の抑圧されたアメリカ社会を背景にお茶と同情が形

式主義的に描かれた舞台劇 *Tea and Sympathy*²⁶も然り、人間の心理描写、あるいは行動の媒体として「お茶」は象徴的に描かれている。『夜と昼』のなかにおいて、これらの液体そしてそれに付随する必需品の果たした役割は人間の心理的内面を表現するのにより効果的な働きをしていることはいままでもない。

グリーンはイギリス人にとっての「お茶」を次のように定義付けて、「お茶」の存在なくしてイギリスはあり得ないとまで言いきっている。

Tea, it will be seen, is not only a restorative, a stimulant, a warmer, a cooler, a thirst quencher, an awakener, a night-cap, the consolation for a bad day, the indispensable, adjunct for a good day, the great life enhancer, but also an addiction, as compulsive as smoking or gambling or drinking whisky. As addictions go, it is clearly harmless. More than that, it is positively nourishing. But tea is something else as well to the British. It is not only a drink, a restorative, an addiction, but something else, something over and above all this. The act of making tea is important, as important as the tea itself.²⁷

グリーンが「お茶をいれる行為は大切であり、お茶そのものと同じくらいに重要である」と言っていることは、前に引用したキャサリンとウィリアムの「お茶の入れ方」を心を落ち着かせる勇気づけに利用した場面と匹敵すると考えられる。さらに、グリーンはイギリス人は危険に直面すると、本能的にお茶を入れたいくなるということも書いているが²⁸、これも同じ引用の「お茶の入れ方」に状況を重ね合わせるができる。グリーンによる「お茶」の習慣の階級差、つまりコーヒーは中流以上で、それ以下の人は「お茶を飲む」という定義付け²⁹とは異なるが、ウルフは小説『夜と昼』の中で、場面によってコーヒーとお茶を使い分けていることから、「コーヒー」は革新的思想、「紅茶」は伝統的因襲といった役割を液体に投影したと考えることができる。

平和な時代であれ、緊急な非常事態の時であれ、お茶は日常のごく自然な存在であるにすぎない。しかし歴史上の大きな史実である「アメリカ独立」や「アヘン戦争」のもととはといえば、この些細な「お茶」が引き金となっていることは周知の事

実である。³⁰ このように些細な「お茶」が引き起こす非日常的現象を巧みに捉えて、ウルフは人間の内面の揺れ動きが決してソリッドでなくむしろリキッドなものであるように心の動きを描写した。つまり、流動体である「お茶」にこころの動きを託したのである。革新的な大志を抱くメアリーの心理描写、ヒルベリー夫人の家庭の天使的生き方に対する心の動揺、キャサリンの結婚観を含めた人生観、これらすべてに含まれたジェンダーの問題とともに、ウルフの意識は自ら置かれている中産階級という地位に甘んじた生活を送りながら現実とは異なった理想との間で、固定することなく、あるときは暖められたり、冷やされたり、非日常的現象を引き起こしたりする「お茶」のように揺れ動き続ける流動性のあるものと言えよう。「夜と昼」はウルフの2作目の小説であり、最後の伝統的作品であるとあると評され³¹、暗に失敗作であるとまで言われたりしているが、これまで述べてきたお茶あるいはそれに付随する物理的事象への心理描写の投影はむしろ意識の流れを思わせる作品の一つと理解することができるのではなかろうか。

* 本稿は、2005年12月27日、英語圏文化研究会第3回大会における、発表原稿を加筆、修正を施したものである。

注

- ¹ 『世界の文学』3、59号 松岡正剛ほか編(東京:朝日新聞社出版、1999)p2-080。
² Bryant Lillywhite, *London Coffee Houses – A Reference Book of Coffee Houses of the Seventeenth, Eighteenth and Nineteenth Centuries*. (London: George Allen and Unwin, 1963), p17.
³ Anthony Glyn, *The British: Portrait of People* (New York: Putnam, 1970), p 101.
⁴ Henry James, *The Bostonians*, (1886; London: Penguin Classics, 2000).
⁵ Virginia Woolf, *Night and Day*, (1992; New York: Oxford UP, 1999), p 45.
⁶ *Night and Day*, p49.
⁷ 磯淵猛、『一杯の紅茶の世界史』、(文芸春秋、2005)、163頁。
⁸ Quentin Bell, *Bloomsbury*, (London: Weidenfeld & Nicolson, 1968), p40.
⁹ *Night and Day*, p178.
¹⁰ Katherine Mansfield, 'A Cup of Tea' in *The Dove's Nest and Other Stories*, (Glasgow: Robert Maclehose, 1923), p24.
¹¹ George Orwell, 'A Nice Cup of Tea' in *As I Please 1943-1946*, (1968; Boston, Nonpareil Book, 2000), p40.
¹² *Night and Day*, p460.
¹³ *Night and Day*, p459.
¹⁴ *Night and Day*, p395.
¹⁵ Jean Moorcroft Wilson, *Virginia Woolf's London – A Guide to Bloomsbury and Beyond –*

(London: Tauris Parke Paperbacks, 2000), p82.

¹⁶ 神谷美恵子、『ヴァージニア・ウルフ研究』、(みすず書房、1981)、99頁。

¹⁷ *Night and Day*, p148.

¹⁸ William Makepeace Thackeray, *The Book of Snobs*, (1848; Hungary:Köln: Konemann, 1999), p97.

¹⁹ Virginia Woolf, 'Reviewing' in *Collected Essays Vol.II* (London: The Hogarth Press,1996), p213.

²⁰ *Night and Day*, p59.

²¹ *Night and Day*, p146.

²² *Night and Day*, p331

²³ 三谷康之、『イギリス紅茶事典—文学に見る食文化—』、(日外アソシエーツ、2002)、125頁。

²⁴ Virginia Woolf *The Diary of Virginia Woolf Vol I*, (London: A Harvest / HBJ Book,1977), p247.

²⁵ 小林章雄編、高山宏、『サロンとクラブ:クラブ近代史異説—領域を知らざる人びと』、(NTT出版、1991)、253頁。

²⁶ Robert Anderson の戯曲、*Tea and Sympathy*, (Random House, 1953)は1953年にアメリカで初演され、わずか2年たらずの間に700回ものロングランが記録された演劇で、思春期の男子学生の寄宿舎生活を描いた作品である。伝統的な閉ざされた世界で、教師の妻ローラは、週末には寄宿生にお茶を入れて話を聞いてやるが、それ以上の人間関係を築いてはならないという暗黙の掟があり、それを破ってしまう。「お茶と同情」が寄宿生にとって形式的な慰みとして描かれている。

²⁷ *The British: Portrait of People*, p106-107.

²⁸ *The British: Portrait of People*, p108.

²⁹ *The British: Portrait of People*, p101.

³⁰ 陳舜臣、『茶の話:茶事遍路』(朝日文藝文庫、1992)参照。

³¹ 'To the Lighthouse, reviewed by Orlo Williams' in T. S. Eliot ed. *The Criterion Vol.VI* (London: Faber and Faber,1967), p75.